日本語の起源（と古代日本語）

木　田　章　義
京都大学名誉教授

2019 年 7 月 20 日、大阪狭山市文化会館 Sayaka ホール

本日は「日本語の起源と古代日本語」という題目で講演いたします。現役を退いた方々も多くおられるようですが、現役を退いたあとは社会に責任を持てない世代になります。しかしこれまで溜め込んできた知識や体験から、こうすればよいのにと思うこともあるかと思います。現役の方々から質問されたときには、正確な知識と的確な判断のもとに意見を述べることも必要でしょう。新たに正確な知識を得るというのは結構難しいものですが、判断力はあまり衰えないものです。

例えば、最近、話題になっている「令和」という年号について、改元は人心を一新するという面もあり、歓迎されることが多く、その命名法までは詳しくは論じられません。しかし昭和、平成を経てきた世代としては、あらためて分析はしておく方が良いでしょう。

もともと改元は人心を一新させる、縁起を担ぐなどの意図がありました。現在は天皇の交代による一代一元号という制度に変わっているので、別の意味も生じていますが、やはり国民が新鮮な気持ちになったことは確かです。そのために、元号についてのマイナスの発言はあまり見られません。しかし客観的に見たときの判断というものは大切です。「雰囲気に流されない」ということは人生の中では重要な姿勢で、それが年季を積んだ人間の心がけるべきことでしょう。

さて、「令和」という命名方法ですが、以下のような問題点がありそうです。

①「昭和」以降、31 年後に同じ「和」字を使用すること。特に第 2 字目に当てたこと。

②「令」字は「命令」が基本的な意味ですから、一見すると「命令」「させる」と理解してしまいます。

③『万葉集』の序文を利用していること。

④文字の選び方が理に合わない。この文脈なら「淑和」。

⑤提名者が推定されたこと。

①は、第一字が不正確に書かれていた場合や印刷が乱れていたりすると、第 2 字目の「和」で判断することになりますが、「昭和」はわずか 31 年前ですから、文書や記録には似た内容のものが多くあります。2 字目の「和」だけでは「昭和」か「令和」か紛れてしまう可能性があるでし

ょう。せめて60年（還暦）過ぎていれば、暫くは混乱は少ないでしょう（200年も経てば紛らわしくなりますが）。同じ字を使用することは避けるべきでした。例えば第一字目が消えてしまっても「治」が見えれば「明治」、「正」が見えれば「大正」と判断できます。私が最初に違和感を感じたのはここでした。

②は、多くの人が感じたことと思います。「令嬢、令名」の例などを挙げられて、始めて「令」にも良い意味もあるのだと気づく位ですから、通常は「命令」系の意味として捉えます。この字面をみると「令レ和（和セシム）」と見えてしまう人が多いでしょう。

③については、『万葉集』は歌集ですから、本文は歌です。従って序文を典拠にするというのは、「校歌斉唱！」で起立し、前奏が終わったときに「着席！」と言われたようなものです。はなはだ奇妙に感じます。

④は、漢文学や国文関係の研究者には同意される方が多いと思います。年号や字（あざな）などの漢字の選択には、一定の形式があります。もし、この序文の文面を利用して、「初春レ令月、氣淑シク風和グ」の対句をとるのなら「淑和」です。この「淑、和」の一方を根拠とすることもあります。例えば「和夫」さんであれば、「和」の一方に足を置いて、その対句にある、「淑」字をとり、「子淑」あるいは「淑甫」という字や号になります。「淑子」さんなら「子和」「和甫」などになるでしょう。この部分を典拠とするのであれば、この方式になります。「令月」の「令」をとるのであれば、これは典拠とは言えず、「採字」というべきでしょう。

⑤は、関係した官僚の責任です。元号候補の提案だけで、決定するのは内閣ですから、命名者は個人にはなりません。しかしやはり提案者が分かってしまうと、その人物の顔が思い浮かび、人によっては反発することもあり得るでしょう。官僚の守秘義務違反という大げさなものではありませんが、良くない傾向です。

こういうことは、若い人びとは気づかないことが多いでしょう。「令和」という年号について質問されれば、この年号によって、国民の気分は新鮮なものになったが、その命名の方法にはこういう問題があると教えてやれば、体験を積んだ年配者の義務は果たしたと言えるでしょう。

（一）日本語と比較された諸言語

日本語の起源についても、正確な知識をもって、質問に答えることができるようにしておくと良いでしょうが、このテーマについては、はっきりとした結論はでていません。いろいろな説が提示され、若い人びとは混乱して、空想的な発想から奇妙な方向へと進むこともあり得ます。古い時代の「日韓同祖論」や、今も時折提示される「日本ユダヤ同祖論」のようなものです。根拠のない仮説に基づいて、大きな政治問題へ発展することもあり得ますので、「日本語の起源」は結構微妙な点を含みます。

まず、これまで日本語と関係があると挙げられた言語は、以下に挙げるとおりです。

朝鮮語：アストン（1879）、白鳥庫吉（1898）、宮崎道三郎（1904）、金沢庄三郎（1910）、大野晋（1952）

高句麗語：新村出（1916）、村山七郎（1961 ～ 62）、李基文（1963）

モンゴル語：小沢重男（1968）

ウラル・アルタイ語：藤岡勝二（1908）、ポッペ（1955）

アルタイ語：小倉進平（1920）、ラムステット（1924）、金田一京助（1938）、ミラー（1971）、福田昆之（1982）

アルタイ語・南島語：新村出（1911）、ポリワーノフ（1924）、新村出（1935）、泉井久之助（1952）、大野晋（1957）、村山七郎（1973）

南島語：ポリワーノフ（1918）、ラベルトン（1924）、松本信広（1942）、崎山理（1990）

ドラヴィダ語：芝蒸（1973）、藤原明（1975）（1981）

タミル語：大野晋（1980 ～ 1、2000、2007）

アイヌ語：服部四郎（1957）、梅原猛（1982）

チベット語・ビルマ語：C・K・Parker（1939）

チベット語：西田竜雄（1976）

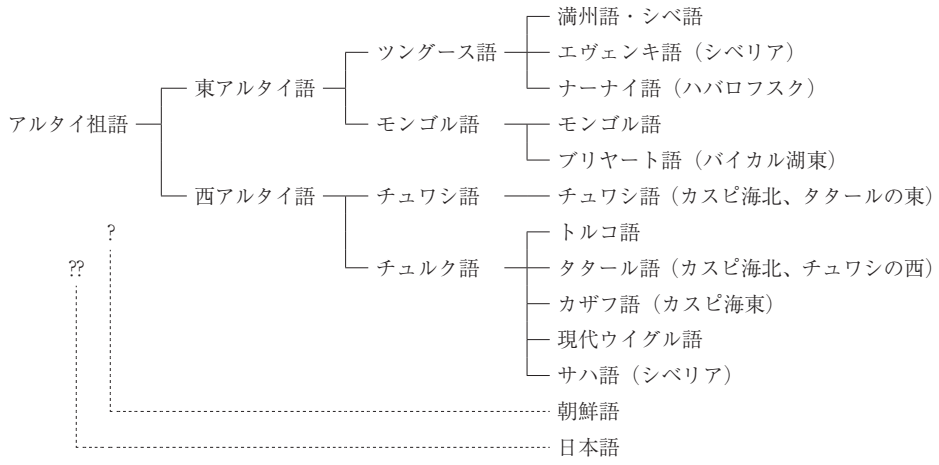
パプアニューギニア諸語：江実（1973）

古極東アジア諸言語（インドネシア・カンボジア／ビルマ系）：安本美典・本田正久（1978）

レプチャ語：安田徳太郎（1955）

まったく成立しない起源論もありますが、世上に流布した、あるいは話題になったものを挙げてあります。まず、もっとも多いのは、アルタイ系の言語、もしくはアルタイ系言語と似た文法構造の言語との比較です。アルタイ系言語とは以下のような言語が含まれます。

《アルタイ系言語》



朝鮮語と日本語は、アルタイ系言語と相似の文法体系を持っているので、古くからアルタイ系言語であろうと推定されてはいましたが、音韻対応という現象が見いだせなかったので、現在も系統は不明ということになっています。これらのアルタイ系言語がどれほど日本語の文法構造と似ているかという例を示します。

〈アルタイ系言語との文法的類似〉

〇私の　父　- は　昨日　山 - から　帰っ - て　き - た。（日本語）

　　næ　abəʒi-nïn　əʒə　san - esə　tol-a　oa - tta。（朝鮮語）

　　ming dada - m(*)　tünügün　taγ - din　qait-ip　kəl- di。（ウイグル語）

〇さっき あなたが　家 - に　入って きた - とき、私 - は　ちょうど　あの 本 - を　読んで - いた。

　　akka　tangsin- i　ʒib- e　tïlə　oassïl- tte　na-nïn　kïnyang　kï　tʃeg- ïl　ilkko- issə-tta。

　　baya　siz(*)　öy-　gə　kir-gən　-　də　mən(*)　dəl　axu　kitab -ni　körü-wat-tti-m。

　　[*：アルタイ系言語には主格助詞は使わないのが普通。ウイグル語には人称語尾がある（一人称、二人称）。dada-m（父 - 私の）、dada-ŋ（父 - 君の）、bili-mən（私は知る）、bili-sən（君は知る）]

こんな風に、日本語の単語をそれぞれの言語の単語と入れ替えると、ほぼ同じ文章となります。このような類似を見ると、これが偶然の一致とは思えないのは当然です。特に朝鮮語は助詞がよく発達していて、外国人が不得手とする「は」と「が」の区別までよく似ているのです。そして隣に位置するのですから、関係が無いのが不思議なくらいです。しかし現在の言語学の方法論では文法的類似は証拠にはならず、「音韻対応」と呼ばれる現象が見つかってはじめて兄弟、あるいは親子関係にあると認められることになっています。その「音韻対応」の現象とは以下のようなものです。

< 音韻対応 >

	父	母	兄弟	名前
サンスクリット	pitár	mater	bhrata	naman
ギリシャ語	patér	meter	phrater	onoma
ラテン語	pater	mater	frater	nomen

この三言語は、印欧語族の古代語ですが、この三つの言語は兄弟関係にあるとされています。それはたとえば、「父」という単語は、表で分かるように pitár、patér、pater とそっくりな形をしています。p、t、r が対応しています。一般的に、複数の言語において、一定の音の規則的な対応関係があるときに音韻対応があるといます。p 音なら p 音（または p 音から変化したことが明らかな f、v などの音）と規則的に対応している現象です。

ところが朝鮮語は日本語とそっくりな文法でありながら、単語を比較してゆくと対応関係はほ

とんどありません。大野晋『日本語の起源』（岩波文庫、1957 年）から一部の例をあげますと、

	日本語	朝鮮語
①助詞	ka	ka（가）
②窯	kama	kama
③笠	kasa	kat
④鵲	kasasagi	kač'ičak
⑤鍵	kagi	karkuri
⑥離れる	karu	kal（간다）
⑦かゆい	kayusi	karyə（가렵다）
⑧所	ku	kot（곳）
⑨蜘蛛	kumo	kəmi（거미）
⑩雲	kumo	kurïm（구름）
⑪堅い	kata	kut（굳다）
⑫黒い	kuro	kəm（검다）
⑬聞く	kiku	kui（귀：耳）

のようなものです。k という比較的残りやすい、あるいは変化しても分かりやすい子音の例なのですが、共通して一致しているのはほぼ語頭の k だけです。しかも意味を見ると、同じかどうか怪しいものが多くあります。①などは朝鮮語の ka の成立は新しいものですから、比較の対象にはなりません。②「窯」は新しい文明語ですから、これも祖語というような古い時代のことを考えるのには不適です（文明語はその文物とともに借用されることが普通だからです）。③は ka が一致していますが、日本語の s が朝鮮語 t となっています。しかし語中の s が t と対応するのでもありません。たとえば「升」は masu（日本語）と mal（朝鮮語）、「枷」は kasi（日本語）と k'al（朝鮮語）のように s と l が対応させられています。「鹿」は sisi（日本語）、sasʌm（朝鮮語）のように s どうしで対応していることにもなっています。つまり、日本語の語中の s は朝鮮語の s とも l とも t とも対応していることになります。これは規則的対応とはなりません。④「鵲」は日本には居ない鳥ですからこれは朝鮮語から輸入されたものです。祖語に遡る証拠にはなりません。⑤「鍵」も文明語ですから例としては良くないでしょう。⑥は日本語は「離れる」の意味、朝鮮語は「行く」の意味ですから、比較するなら日本語「行く」でないといけないでしょう。⑦は朝鮮語の r の脱落と考えることができます。⑧の日本語の ku というのは、「いづく」の「く」のつもりでしょう。これは朝鮮語の t の脱落とみることは可能です。⑨と⑩は、日本語では同形であるのに（アクセントが違いますが）、朝鮮語の二つの形と対応するというのは不自然で、どちらかが、あるいはどちらも例としてふさわしくないということになります。⑪ kata と kut は母音が違いますが、k と t は一致しています。⑫は日本語 r と朝鮮語 m の対応が不自然です。⑬は日本語「聞く」という動詞と、朝鮮語「kui」という「耳」という意味の名詞です。語頭の k 以外

は一致しません。

このように見てくると、この例の中で、ひょっとすると関係するかもしれないという例は、「笠」、「かゆい」、kumo の一方（蜘蛛か雲）、「堅い」くらいでしょうか。とても対応関係が見いだせるというレベルではありません。このような強引なやり方をしても 270 例ほどしか集められないのですから、上で言いました「音韻対応」は存在していないことになるでしょう。つまり、親縁関係は証明できていないということです。

アルタイ系言語は文法的にはよく似ていますので、モンゴル語や高句麗語も比較の対象となりましたが、モンゴル語の場合には朝鮮語よりも似た形のものが少なく、高句麗語は滅んでしまったので、地名から二三の数詞の類似を挙げる程度です。したがって親疎の関係などはとても測ることはできません。ウイグル語やトルコ系言語と比較した専門書は知りません。

もう一つ、比較的よく比べられるのは、南島語（アウストロネシア語族）です。これは南北はフィリピンからオーストラリアの北（マレー半島、ニューギニア低地を含む）、東西はイースター島からマダガスカル島に至る広範な地域に広がる、ポリネシア、メラネシア、ミクロネシアと呼ばれる島嶼地域で使用される言語です。

これは柳田国男や島崎藤村の椰子の実の漂着によるロマンチックなイメージもあって、南島の人びとが、沖縄列島を伝ってやってきて、日本列島に定住していたという仮説です。南島語を話す人々の中にアルタイ語的言語をもった民族が到来して（弥生時代の始まり）、南島語との混種語ができ、現在の日本語になったという筋書きです。つまり発音は南島語的、文法はアルタイ語的であることを整合させようとしたものです。

この立場に立ってみようとしても、実は、日本語と南島語とはかなりの文法的ちがいがあります。例えば、朝倉純孝『インドネシア語四週間』（大学書林、昭和 27 年）から例をとれば、

形容詞は名詞の後（修飾語は被修飾語の後）

○ rumah　besar　itu
　家　　大きい　その（その大きい家）

助動詞は動詞の前に来る。

○ saja　sudah　makan。
　私　　た　　食べる（私は食べた）

○ saja　nanthi　makan。
　私　　だろう　食べる（私は食べるだろう）

○ kuda　hitam　itu　saja　membeli dia。（動作を焦点化）
　馬　　黒い　その　私　買った　それ（その黒い馬、私はそれを買った）

○ inilah barang-barang jang　hendak saja kirimkan kepadanja。
　この　品物　関係代名詞　したい　私　　送る　　彼に（これは私が彼に送ろうと思っ

ていた品物）

のように、かなり日本語とは異なっています。接頭辞、接中辞が文法的要素として重要ですが、日本語にはその痕跡がありません（「真っ白」「真っ青」などの「まっ」などがそうだと言われることがありますが、これは語彙の強調形であって、文法的な働きをする接頭辞ではありません）。語彙比較されたものについても、似たものは多くありません。つまり日本語の中に南島語的要素はほとんど無いという状況です。発音が簡単であるという点くらいでしょうが、発音だけならばイタリア語などのラテン系言語もよく似ています。

つまり南島語説は幻想的な仮説で、魅力的ではありますが、日本語との関係ははっきりせず、むしろ否定的な結果になります。

その後、起源論は活発ではなかったのですが、インド南部で話されているドラヴィダ語族との関係が注目されるようになりました。この言語群を代表してタミル語が取り上げられました。

タミル語の文法はアルタイ系言語と同じ程度に似ています。ドラヴィダ語はアルタイ系言語であるという意見もあるくらいです。

Naṉ　nēṟṟu　arici　cāppiṭṭēṉ。

私　昨日　ご飯　食べた。

Eṉ　tantai nēṟṟu　malai-yi-liruntu　tirumpi　vantār。

私の　父　昨日　山　-　から　帰って　きた。

大野晋『日本語の形成』（岩波書店、2000 年）からその根拠とする例をあげると、文章の骨格を形成する「助詞」では、

格助詞	日本語		タミル語
	① no（の）	:	iṉ
	② ni（に）	:	iṉ
	③ tu（つ）	:	attu、atu
	④ ga（が）	:	aka、akam
	⑤ kara（から）	:	kaal
	⑥ to（と）	:	oṭu
係助詞			
	① mo（も）	:	um
	② fa（は）	:	vaay
	③ ka（か）	:	kkol、kolloo
	④ ya（や）	:	ee<*yaa
	⑤ so（そ）	:	taan

などが類似した形態をとり、その用法も似ているとしています。たとえば日本語助詞「か」に対応するタミル語の「kkol（kolloo）」は、文末に来たときには、①疑問、②詠嘆、③反語（否定と

共起）を表し、日本語「か」と同じ働きをする。そのうえ文中に来ると、文末が名詞か連体形で終わるというのですから、日本語古文の「係結び」と並行した現象まで持っていることになります（か～連体形終止）。ここまで似ていると本当かと疑ってしまうほどです。

動詞の末尾に接続するのは、日本語では助動詞ですが、タミル語では「接辞」に分類されます。日本語でも「接辞」と呼んでもよいのですが、日本語の「接辞」は活用しますので、「接辞」とは区別して「助動詞」と呼びます（アルタイ系言語も「接辞」と分類します）。

タミル語には、自動詞化接辞と他動詞化接辞があり、動詞語幹に接続することによって、その動詞を自動詞にしたり、他動詞にしたりできます。たとえば、ur-（丸）という語幹に自動詞化接辞 ul が接続すると、ur-ul（丸まる）のように自動詞となり、他動詞化接辞 -ṭṭu が接続すると ur-uṭṭu（丸める）のように他動詞となります。これは日本語の自動詞化語尾「る」（自発助動詞と同源）、他動詞化語尾「す」（使役助動詞と同源）と似ています。例えば「あま（余）-」という語幹に、「る」が接続して「あま - る」（自動詞）となり、「す」が接続すれば「あま - す」のように他動詞になりますが、この構造と同じです。

実は、このような自動詞化語尾、他動詞化語尾は、日本語、タミル語だけでなく、アルタイ語に共通した語法です。はるか遠くの、間にいろいろな言語群を挟んだ地域で話されているタミル語に並行した現象があることに驚きます。その形態は、日本語、タミル語どうしよりもタミル語とウイグル語の方が似ています（モンゴル語はかなり異なります）。

	自動詞化語尾		他動詞化語尾	
タミル語	-ul	：	-ṭṭu	
ウイグル語	-ul	：	-t（dur）	［buz-ul（壊れる）：buz-dur（壊す）］
モンゴル語	-γda	：	-γul	［kogege-gde（追われる）：yab-γul（行かせる）］

タミル語には、ウイグル語と同じように人称語尾があります。大野晋氏の利用したサンガム（タミル語の古い詩歌集）は読めませんので、現代語から例示します。カルバナ・ジョイ、袋井由布子『タミル語入門』（南船北馬舎）よりますと、

nāṉ　paḍ ikki-ṟeṉ。（-ṟeṉ：第一人称）
私　学ぶ　- 私
nī　paḍ ikki-ṟāy。（-ṟāy：第二人称）
君　学ぶ　- 君
avaṉ　paḍ ikki-ṟāṉ。（-ṟāṉ：第三人称・男）
彼　学ぶ　- 彼
avaḷ　paḍ ikki-ṟāḷ。（-ṟāḷ：第三人称・女）
彼女　学ぶ　- 彼女

のように人称によって動詞や名詞の最後に人称に応じた接辞がつきます。タミル語では第三人称もあり、男性と女性で異なっているという点が、アルタイ系言語とは異なったところです。

語彙比較についても、明瞭な音韻対応とは言えませんが、初めのCVCの部分だけの比較では、似たものが多いということは間違いありません。少なくともこれまで比較されてきた諸言語と比べると、それは段違いに似ていると言ってもよいでしょう。例えば、大野晋『日本語の起源　新版』（岩波新書、1994年）によれば、以下のような語が、日本語p（F）とタミル語pの対応例としてあげられています。古代日本語ではハ行はパ行であったので、ローマ字ではpに直し、方言の例は省きます。

歯	pa	pal（歯）
仕事の分量	pak-a	pak-u（割り当て・分担）
布、旗、凧	pat-a	paṭ-am（布、旗、凧）
泊つ	pat-u	paṭ-u（停泊する）
初	pat-u	paṭ-u（最初に生じる）
畠	pat-akë	paṭ-ukar（陸田・水田）
疹	pat-ake	paṭ-uvaṉ（できもの）

など、110例が挙げられています。CVCが一致しているものが多く、2番目のCには少し異なるものもあります。上の例で行けば、日本語tとタミル語ṭ（反り舌音）が類似音です。語彙比較においても、これまでの比較論に比べても、はるかによく似ていることが分ります。

タミル語起源説が出たとき、痛烈な批判が週刊誌を中心にして巻き起こりました。「大野晋氏は国語学者か！」というような激烈な非難が集中しました。この騒動のお陰で、日本語起源論を扱うのはタブーのようになってしまいました。私はまだ若い頃でしたが、「何と恐ろしい世界か！」と思ったものです。

しかし実はその強烈な非難をしていたある言語学者は、タミル語説について「似てい過ぎる」と言ったことが、側近の研究者の随筆で明らかにされています（小島幸枝『圏外の精神』、武蔵野書院、1999年）。そしてこの側近の方は、この言語学者は「この学説を直観的に認められていたと信ずる」とまで推察しています。そのほか起源論を論じていた一人の言語学者も、似すぎていると感じたと書いています。つまり批判は激しく起こって中傷にまで至り、タミル語説は否定されているように見えたのですが、実際には、否定できないことは認められていたと考えて良いようです。

タミル語などのドラヴィダ語研究者も批判はしていますが、それはまだ一部分についてだけで、全体ではありません。やはり研究する間に「どうしてこんなに似ているのか」と思うことがあると仰る方もおられます。常識で考えれば、遙か5000キロ離れた、日本とまったく関係のなさそうな言語が日本語に似ていると言われても、まずは拒否感が働くのは仕方ありません。

大野説は、単純なタミル語起源論を発展させて、タミル語はタミル文明とともに紀元前1000年に北九州に到来して、弥生時代がはじまったと主張しています。そしてタミル語が、その地域で話されていたポリネシア系言語（南島語）と混交したことを匂わせています。その混交した言語

をヤマトコトバと呼び、それが北九州から本州へと広がってゆき、一方、東日本ではアイヌ語が広がっていましたが、そこにもこのヤマトコトバが浸透していったと推定しています。西日本と東日本の方言差もその基盤となったポリネシア系言語とアイヌ語との違いによると推定しているようです。

大野説が批判を受けやすかったのは、語彙の比較では日本の方言を利用したり、新しい語彙まで含めて、一見しておかしいと感じられるものが入っていたことも原因でしょう。各地の方言を利用すれば、似た単語はいくつも発見できますが、それが古いものである根拠がありません。古代語の専門家でありながら、新しい語彙を利用してしまったのも、証明したいという気持ちの焦りだったのでしょうが、語彙比較の信頼性に疑問を抱かれたことでしょう。大野氏が若い頃に『日本語の起源』という本を書いて、文化の類似まで援用し、自信満々に朝鮮語起源論をぶち上げたのに、一転してタミル語起源論に移り、同名の『日本語の起源（新版)』を書き、同じように文化の類似を挙げて自信満々にぶち上げたことも不信感を起こした原因の一つだろうと思います。紀元前1000年にタミル族が日本にやってきたという説明も、考古学的遺物や文化の類似からの推定です。このあたりも、自分で最後まで結論を出しておきたいと思ってのことでしょうが、少々広げすぎたという感じがします。このタミル族が北九州に到来したという意見も、拒否感を感じさせた原因のはずです。

弥生時代の始まりが、タミル人の来訪によるというのは、これまでの常識とはかけ離れています。実際に、後に述べます遺伝子の分布からも、タミル人が大挙して日本に到来したことは考えにくいことです。もし、タミル語と日本語が関係するなら、人類の移動の軌跡の内のどこかで、タミル語の話し手と日本語の話し手が関係していたという、おそらく1万年、2万年の単位で考えなくてはならないでしょう。そんな長い間に言語がどのように変化するのか、誰にも分からないのですが、もしタミル語と日本語が親縁関係にあるとすれば、1万年、2万年経っても、共通した部分を残すことがあるという、興味深い結果になります。

タミル語と日本語との比較については、大野氏の説明が半分しか正しくないとしても、似ていることは間違いありません。公平にその説明を読むならば、現在ではいちばん可能性の高い起源論であると言えるでしょう。

もう一つ、興味を引かれるのがアイヌ語です。

文法的には類似していますし、発音の面でも似ています。ただ、アイヌ語は接頭辞・接尾辞が多くて、人称接頭辞がすべての接頭辞に先立つという特徴があります。打消や反語を表す接辞が動詞の直前にたつのも目立った違いです。細かくみると、語構造に異なった点が多いようです。

まず、佐藤知己『アイヌ語文法の基礎』（大学書林)、金田一京助「金田一京助著作集」（第五巻）（三省堂）などから例を挙げます。

○cise　okari　kim　un　　kamuy　apkas。

家　回りに　山　に居る　神　　歩く。

○ toan　katkemat toan　kur　sine　cep　kore。

あの　　奥さん　あの　人　一つ　魚　与える。

のように、語順はほぼ日本語と同じです。

人称接頭辞があって、語のはじめに付いて人称をあらわします。たとえば「私」を主格とした時には動詞の前に ku を付けて、ku-kor（私が持つ）のように表現します。この ku は独立して用いられませんので、単語ではありません（接頭辞となります）。「君」なら、e- を付けて e-kor（君が持つ）、「彼」なら kor（彼が持つ）のように何も付けません。名詞の場合にも、ku-sapa（私の頭）、e-sapa（君の頭）、sapa（彼の頭）のようになります。第三人称接頭辞はないと言っても良さそうです。アルタイ語やタミル語の人称接辞は単語のうしろに付けるのとは違っています。

語彙を見ると、その構成法には違いがあるようです。たとえば、

○ a-e-p（私たち－食べる－もの）＝食べ物

○ a-mi-p（私達－着る－もの）＝着物

のように aep が一語になります。このような構成法は、アメリカ・インディアンの言語に見られる抱合的言語とか輯合的言語と呼ばれる形式に似ており、少し複雑なものになると、

○ e　- i　-　konte - am-pe

君が - 私に- 与えた -　もの（君に貰ったもの）

○ an -　e -　nu-　re　　itaki

私が - 君に- 聞か せた　話

となります。eikonteampe が一語です（もしくは一単位です）。

例の如く、音韻対応を調べるために語彙の比較をしてみますと、梅原猛「古代日本語とアイヌ語」（『梅原猛著作集』巻 20、集英社）によれば、

日本語		アイヌ語
① hachi（鉢）	：	pachi（鉢）
② hera（篦）	：	pera（篦）
③ hone（骨）	：	pone（骨）
④ hora（洞）	：	poru（洞窟）
⑤ huta（蓋）	：	puta（蓋）
⑥ hie（稗）	：	piyapa（稗）
⑦ hito（人）	：	pito（神、カムイ）
⑧ huri（振り）	：	puri（行い、態度）
⑨ hikari（光）	：	peker（明るい）
⑩ hakari（秤）	：	pakari（秤）

のような例が挙げられています（上述のごとく、日本の古代語ではハ行は p 音）。梅原氏はアイ

ヌ語と関係があるという立場の方です。

このｐで始まる語彙を見ると、確かに似ています。この類似については、日本語からアイヌ語に借用された語彙であると言われてきました。しかし、「骨」や「人」、あるいは「光」のような基本的な語彙も借用されたというのも不自然ですし、最近ではアイヌ語「kamuy（神）」が日本語「kamï（神）」の借用語がであるという解釈に疑問を持たれるようになっています。このような社会の根幹にある宗教的概念までも借用するということは考えにくいというのです。以前に服部四郎という言語学者がアイヌ語の調査をしたあと、アイヌ語との基本語の類似は無視できず、再考してみるべきであるという意見を発表しています（服部四郎編『アイヌ語方言辞典』（1964年８月、岩波書店））。

明治時代に始めて体系的にアイヌ語を研究した金田一京助という言語学者が、アイヌ語と日本語は無関係で、アイヌ語にある日本語に似た言葉は日本語からの借用であると解釈しました。服部四郎は金田一京助の弟子筋にあたります。東京大学には先生の説はできるだけ否定しないという習慣があるようですが、それを越えて再考すべきであると言ったのは、やはりかなりその類似に心が引かれたからでしょう。

ただ、ここに挙がっているのは名詞や形容詞ですが、動詞を比べてみると、その動詞構成法に違いがあるせいか、似たものはあまりありません。このように品詞によって違いがあるのはどういう経緯に依るのかなども考えてゆかねばならないでしょう。

（二）考古学・遺伝学の成果

次に考古学や遺伝学の成果の利用についてです。

これらは文化の移動や人の移動を辿るときに役に立つ学問ですから、言語の移動、広がりについての参考になります。

弥生時代にはほぼ日本語が日本列島で話されていたと想定できますから、起源に関係するのは石器時代でしょう。縄文時代以前です。その発掘物の一部をあげますと、

12万年前：日本列島に人類（出雲市多伎町・砂原遺跡の石器）
90000年前：岩手県遠野市・金取遺跡の石器。
38000年前：神津島・黒曜石静岡出土。
35000年前：栃木県・高原山・黒曜石の採掘。
16500年前：青森県・外が浜町・大平山遺跡の土器。
16000年前：新石器時代・縄文時代。
12000年前：北海道でシベリア発見と同じ細石器出土。
　北海道産の石を使った石器がシベリアで発見される。
　九州の細石器は黄河流域から九州を経由して本州へ伝わる。

のようなものです。縄文遺跡（新石器時代）が東日本に多いということも関係するでしょうが、

ここで分かることは北方との関係が深そうだと言うことです。シベリアと北海道には共通した細石器（中国東部、シベリア・バイカル湖付近で発達）が発見されています。ただ、物の共通性はわかりますが、それを使用した人間がどのような人であったかはわかりません。

その点、遺伝学では人の移動が分かります。ただしこれも人が移動しただけで、その人がどのような言語を話していたかまでは分かりません。それでも人間の移動は、言語の広がりを考えるときには大きなヒントになります。遺伝学の発達はめざましく、ゲノムの解析などで人の分布や移動経路などがかなりよく分かるようになっています。

遺伝子についての復習をしておきましょう。人間の常染色体は22対、性染色体は1対（xx〈女性〉、xy〈男性〉）。染色体はDNAで構成される。DNAは塩基で構成される。四つの塩基、A（アデニン）、T（チミン）、G（グアニン）、C（シトシン）の組み合わせが遺伝子を構成する。

遺伝子の研究中で、以下の三つの方向からの研究を参照します。

①ミトコンドリア（mt）のDNA（母親の遺伝子）

②Y遺伝子のDNA（父親の遺伝子）：D型、E型、YAP変異

③免疫グロブリン

この三つ以外に、人間の全体を規定している核遺伝子があります。これは膨大な量なのでまだ解析途上ですが、その研究からは、日本列島人は朝鮮半島人と同じグループで、まず日本列島人（本州人、アイヌ人、琉球人が一つの群）と朝鮮半島人に分かれ、そのあと、日本列島人から琉球人とアイヌ人が分かれたと想定されています。

ミトコンドリアは母親から受け継ぐもので、母系をたどることができます。その結果は、日本列島人と朝鮮半島人とは共通性が高いということになっています。

ミトコンドリア遺伝子が母系なら、男系をたどるのはY遺伝子です。男性はY遺伝子を父親から引き継いでゆきます。天皇家が男系で継承されてゆくのは、つまりはY遺伝子の一つの系統を天皇家として特別視していることになります。女系天皇を認めると、そのY遺伝子の継承は途絶えることになり、天皇家としての価値はほぼなくなります。Y遺伝子が続くことに何の値打ちがあるのかという疑問もでてくるでしょうが、文化は幻想によって成り立つものです。

このY遺伝子の分析からは、チベット人と共通性があるという不思議な結果が出てきます。

人類がアフリカを出た頃か、中東あたりにたむろしていた頃に、遺伝子が重複する突然変異を起こした男がいました。この重複遺伝子をもっている型をYAP型と呼びます。6万年前とも、もっと前とも言われていますが、このあたりの年数については概数で、研究者によってかなりの開きがありますので、だいたいの目安としておくのがいいでしょう。その突然変異を起こした男の子孫が後に、D型とE型に分かれました。そのD型はどういう訳か、日本とチベットに分布しているのです。これは日本人とチベット人が、アフリカ北部か中東から、大陸を通り、日本とチベットに到達する間のどこかで、一緒に生活していた時代があるということです。このYAP型をもっているもう一つのE型にはユダヤ人もおり、時折、ユダヤ人と日本人は同族であるという説

が唱えられることがあります。日本人とユダヤ人が一緒に生活していた時代があったのは確かでしょうが、おそらくそれは何万年か前ということになり、その頃はまだユダヤ人も日本人も区別がなかっただろうと思われます。現在のユダヤ人の歴史は紀元前1700年頃から始まるとされていますが、その時には日本列島に現在の日本人の本となった人びとが生活していたはずです。

この遺伝学の中で、興味深いのは免疫グロブリン（Gm）遺伝子の研究です。血液の免疫を作る遺伝子ですが、これは人種を区別出来るという点で、非常に貴重です。その分布図を挙げておきます。これは松本秀雄という方の論文からの転用です（松本秀雄『日本人は何処から来たか』、日本放送出版協会、1992年。もっと細部まで見たい方は、ネット上にもありますのでそれをご覧下さい）。

図で分かりますように、日本人はag型が多く、次いでab3st型が特徴的です。若干のafb1b3型とaxg型があります。モンゴロイド（蒙古人種）ですが、同じモンゴロイドでも南方のモンゴロイドはafb1b3型の占める量が多く、北のモンゴロイドとはかなり異なっています。つまりモンゴロイドは北方型と南方型に分けられるのです。面白いことに沖縄は南方のモンゴロイド型が多いかと思うと、ほぼ本州の日本人と同じ型です。これは沖縄人は本州人と同じ基盤の民族で、南方のモンゴロイドとは違っていることを示しており、南島語を話していた人びとが沖縄列島を伝って、本州に広がっていたという仮説が成り立ちにくいことが分かります。

一方、タミル語などのドラヴィダ語の話し手のいるインド南部、スリランカの地域では、ag型は日本人と共通していますが、ab3st型が少なく、特に特徴的なのは、fb1b3型で示されるコーカソイド（白人種）の型を持っていることです。これはコーカソイドとの混血があったことを示しています。fb1b3型を除けば、中国奥地の人びとと共通点が多いようです。

この免疫グロブリンの型によって、大野説のように、紀元前1000年頃に、タミル族が日本に来て、現地のポリネシア系住民の言葉と混交してヤマトコトバとなったという説が成立しにくいことが分かります。タミル人が流れ着いたとしても、コーカソイドとの混血以前でなくてはなりません。インドの歴史はインダス文明でも紀元前3000年程度ですが、そこへアーリア人が侵入してきたとも言われています。少なくともアーリア人が侵入する以前でないといけないわけです。またもし、日本にやってきたタミル人が居たとしても、現地人に同化されてしまう程度の人数だったでしょう。

つまり、免疫グロブリンの分布からは、南島人が日本列島に住んでいて、タミル語を話す人びとがやってきて混交したという説が成り立たないだけでなく、南島語とアルタイ語の混交という考えも難しいことになります。もともと南島人は5000年ほど前、中国南部から拡散したと言われています。

松本秀雄氏は、日本人ともっとも似ている型を持つのは、シベリアのバイカル湖周辺に住むモンゴル族の一支族、ブリヤート・モンゴル族なので、このブリヤート・モンゴル族こそ日本人の祖先であると主張しました。「日本人バイカル湖起源説」です。

ちなみに、この分布図によると、アフリカに残った人びと、つまり「出アフリカ」をしなかった人びとは、独自の発展をしていることが分かります。最も古いa型の遺伝子をもちつづけ、ab1c型とab1b3型が特徴的です。南アフリカ共和国に、コーカソイドを表すfb1b3型の遺伝子が多いのは白人が大量に移民した歴史を証拠立てています。また、オーストラリアの原住民であるアボリジニと南アメリカのインディアンはよく似た遺伝子型をもっており、この二つの地域の人びとが古い時代にそれぞれの地点に到達していたことも分かります。アボリジニのオーストラリア到達は4万年とも12万年前とも、いろいろな説があります。南米のインディオは2万5000年前とも言われますが、ちょっと年代が離れすぎて不自然です。

とにかく、「出アフリカ」を果たした人びとは、突然変異を繰りかえしながら世界に広がっていったわけですが、この図を見ていますと、いろいろな想像ができ、たいへん楽しい気持ちになります。よくご覧になってください。人類の移動の経路についても最近は研究が進んでいますので参照されますと、もっと興味深いことに気づくことと思います。

さて、このように見てきますと、日本語の起源については、少しずつパズルが組み合ってきていることも分かります。とにかく常識や願望で決めつけることなく、言葉の類似や文法の類似などを、ゆっくりと調べてゆく必要があるということです。タミル語起源説の折に、起源論がタブーのようになってしまったために、起源論は真正面から論じられなくなり、我々の楽しみの一つが表舞台から消えていました。たいへん罪深い論議でした（論議とは言えず、非難中傷に近かったと感じますが）。

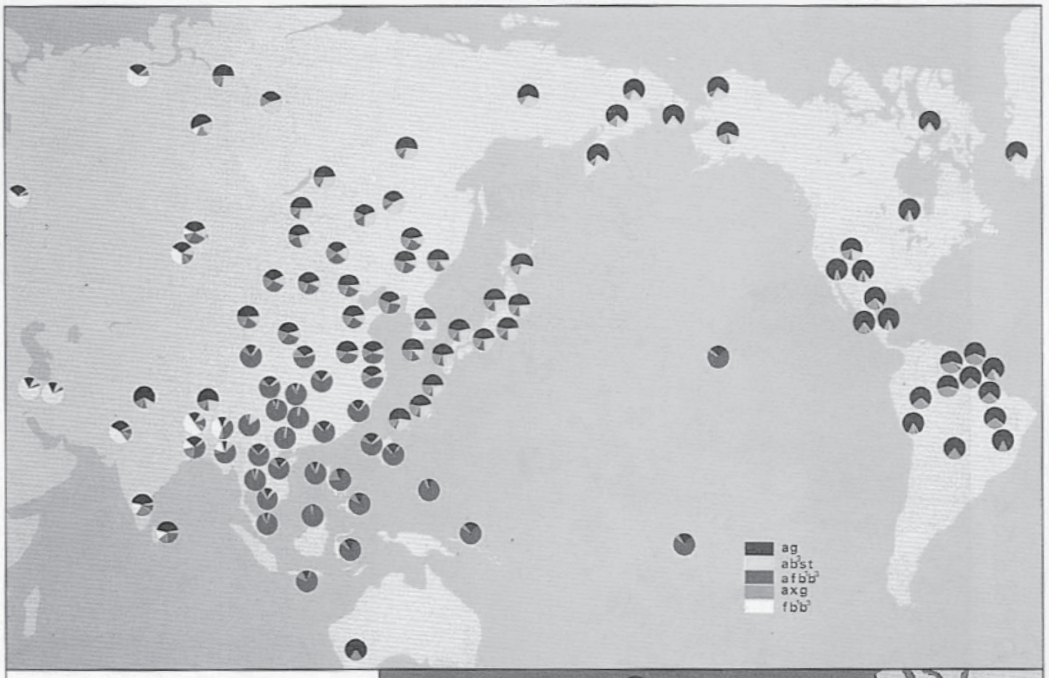
これからゆっくりと起源論を楽しむようにしましょう。

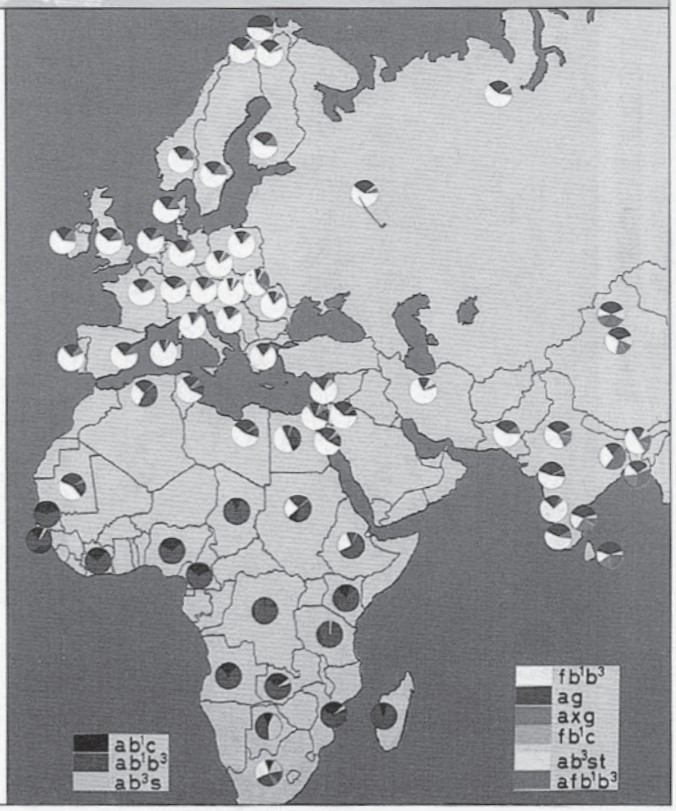
本来ならここから古代日本語の話に移るべきなのですが、すでにここまでで時間を超過しております。申し訳ありませんが、古代日本語がどのような言語であったのか、日本語の変化はどれくらいの時間をかけて変化を完成させるのか、また最も古い時代の日本語を再現するとどのような体系だったのか、などについては、次の機会にお話したいと思います。

なお、ここで述べました各言語との対照のもう少し詳しい説明については、

『日本語の起源と古代日本語』（京都大学文学研究科編、2015年3月、臨川書店）

を参照していただければ幸いです。





➡図3　ヨーロッパおよびアフリカの血液型Gm遺伝子の分布

⬆図2　血液型Gm遺伝子の分布

松本秀雄『日本人は何処から来たか』（日本放送出版協会、1992 年）より